

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 縄文時代の柄鏡形住居址の再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本橋, 恵美子, Motohashi, Emiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000425">https://doi.org/10.57529/0002000425</a>

## 縄文時代の柄鏡形住居址の再検討

本橋 恵美子

### I はじめに

約一万年以上続く縄文時代のなかでも、とりわけ中期は他の時期に比べ遺跡数が多い。特に関東地方では、関東ローム層まで深く掘り下げる中期の竪穴住居が、明瞭な形で住居形態を把握できる。縄文時代中期後葉になるとローム層面まで深く掘り込まないために住居形態がわかりづらくなっている。さらに、竪穴住居の構築の仕方、掘り込みが浅いだけでなく、主柱から壁柱への構造上の変化がみられるのは、中期後葉からである。

一方、南関東では中期の何型式にもわたって集落がつくられた大規模遺跡においては、環状を呈する集落形態がみられるが、中期後葉の柄鏡形住居の出現によって環状集落が崩壊する。柄鏡形住居は中期後葉に出現し、中期末葉には南関東を中心に中部地方、東海、東北地方南部まで分布が拡大する。柄鏡形住居の出現は、中期までの集落構造を変える契機となったと考えられる。

「柄鏡形住居」は、桜井清彦が一九六七年に神奈川県横浜市猿田遺跡の住居址を近世の柄鏡の形から命名したものであるが（桜井一九六七 二八頁）、その後、特異な形態やその性格を巡って、村田文夫と山本暉久の間で「特殊」か

「一般」か、という論争がおこり（村田一九七六・山本一九七六）、多くの研究者に波紋を投げかけた。筆者も柄鏡形住居の出現について、三〇年前に取り上げ、柄鏡形住居の出現は、小張り出しをもつ「潮見台型」と敷石や配石をもつ住居、屋外の埋甕をともなう敷石あるいは配石遺構が融合したものと考えた（本橋一九八八）。約三〇年経過して、遺跡の発掘事例が増え柄鏡形住居の出現については拙稿を補強する資料が増えてきたものと考え、再び柄鏡形住居の出現について検討したい。

## Ⅱ 柄鏡形住居出現前の住居形態の様相

### （一）潮見台型住居と配石

「柄鏡形住居」を山本暉久は、「柄鏡形敷石住居」として成立したものであると考える。確かに、石材の獲得できる地域では、柄鏡形敷石住居として分布し、石材の乏しい地域では石のない柄鏡形住居が分布している。また、柄鏡形住居が加曾利E式土器の分布範囲に伝播するという主張も支持したい（山本一九八八・本橋一九八八）。出現期については、山本は小さな張り出しをもつ住居を柄鏡形の初源期と捉え、柄鏡形住居の概念に含めて考える。私は、この潮見台型住居（本橋 前掲）は、柄鏡形住居とは別に捉える。本稿は、この点を中心に述べ、縄文時代中期後葉に柄鏡形住居が出現し、環状集落が崩壊する画期となった点を強調したい。

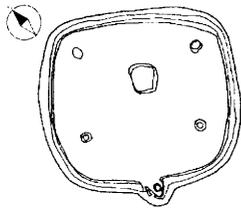
本論に入る前の前提として、住居跡の時期設定は加曾利E式土器の四期区分のうち、加曾利E3式は胴部文様の平行沈線文は磨消縄文（条線文）であり、口縁部文様帯がなくなるものを新段階として区分する。また、加曾利E4式は縄文がLRで、施文手順が充填手法に代わるものとし、微隆起文は新段階とする。微隆起文をもつ加曾利E4式

土器は称名寺式土器に伴う事例が多いが、中期の範疇で捉えたい。土器の新旧関係段階区分は、おおむね東京編年や神奈川編年と大きく隔たるものではない。

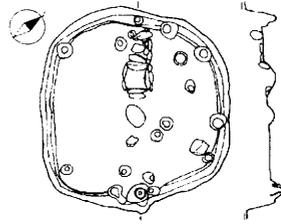
柄鏡形住居出現前の住居形態として、竪穴住居で小さな張り出しをもつものを「潮見台型」とする（本橋 前掲）。潮見台型住居は隅丸円方形が多く、小さな張り出し部には埋甕とその脇に対応するピットがみられる点が特徴的である。

図1・1の神奈川県川崎市潮見台遺跡のJ8号住居址を典型とする。潮見台遺跡は、隅丸方形で四本柱、周溝をもつ。小さな張り出し部には埋甕がみられる。平面形態が隅丸方形であるものは、6の長野県高森町増野新切遺跡D8号住居址と8の長野県伊那市月見松遺跡第三号住居址である。この二例は曾利Ⅱ式土器の埋甕を伴う。炉址を挟んで埋甕と対峙する位置に配石がみられる。四本柱で、埋甕の脇に対ピットがある。4は相模原市川尻中村遺跡の四号住居址で、支柱穴は五本で、南側の小張り出しに埋甕がみられる。

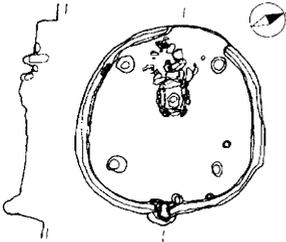
奥壁部に配石がみられる事例は、2・3・5・6・8である。2は、相模原市寺原遺跡二号住居址で、奥壁部に立石と配石、東側に対ピットをとまう小張り出しがみられる。3は、相模原市大地開戸遺跡七号住居址で、楕円形の平面形態に四本柱、奥壁部に立石をとまう配石があり、炉址と対峙する位置に小張り出しと埋甕がみられる。5は、神奈川県山北町尾崎遺跡二六号住居址で、炉址を中心として、奥壁部に立石があり、対峙する位置に小張り出しと埋甕がある。この立石は、長さが1・1mを測る。6は、長野県下伊那郡高森町増野新切遺跡D区八号住居址で、方形形態で、4本柱、南東に2対のピットと埋甕がみられる。奥壁部にはピットを囲む配石があり、炉址を中心に敷石、埋甕と対峙する位置にある。7は、長野県茅野市棚畑遺跡一三三号住居址で、小張り出しはみられないが、埋甕の脇に対応するピットがある、五本柱の楕円形の住居形態。主軸線上に奥壁部の柱穴、炉址、埋甕が並ぶ。埋甕は土器が逆位に埋設され、石蓋を伴う。8は、長野県伊那市月見松遺跡第三号址で、隅円方形の住居形態で、四本柱である。



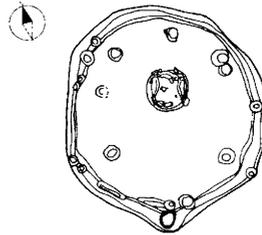
1 潮見台遺跡 8号住居址



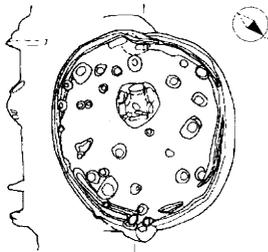
2 寺原遺跡 2号住居址



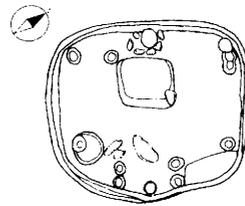
3 大地開戸遺跡 26号住居址



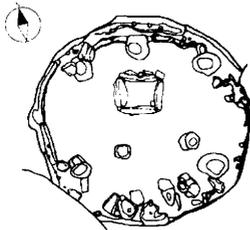
4 川尻中村遺跡 4号住居址



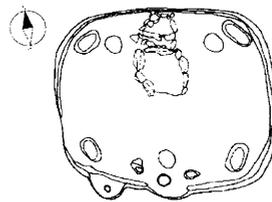
5 尾崎遺跡 26号住居址



6 増野新切遺跡D 8号住居址



7 棚畑遺跡 123号住居址



8 月見松遺跡第3号址

図1 潮見台型と立石・配石をもつ住居跡

主軸線上に炉址、対ピット、小張り出しと埋甕がみられる。

潮見台型住居の他に、竪穴住居で敷石を伴う事例は、決して多くはない。埼玉県嵐山町行司免遺跡第二七九号住居址は、加曾利E3新式期の円形の住居形態で、居住空間の一部に敷石がみられる。因みに行司免遺跡は、縄文時代中期中葉勝坂1式から中期後葉加曾利E3新式期まで継続して居住が続く環状集落であるが、中期末葉加曾利E4式期の住居址はなく、後期初頭称名寺式I期の竪穴住居址が一軒存在するが、柄鏡形ではない。

住居の時期についてみると川尻中村遺跡と月見松遺跡は曾利Ⅱ式、大地開戸遺跡は加曾利E3式、増野新切遺跡は唐草文系土器、寺原遺跡と棚畑遺跡は加曾利E3新式期である。潮見台型の住居は加曾利E2期あるいは、曾利Ⅱ式期では方形形態が目立つ。加曾利E3式、加曾利E3新式期には円形、楕円形が多い傾向がある。また、潮見台型・配石や立石をとまう住居は住居主軸を中心とした左右対称の構造をもつ特徴がある。なお、配石や立石は、中部地域を中心とした山地地域に特徴的である。

## (二) 出現期の柄鏡形住居址

敷石住居址は、竪穴住居のような掘り込みが確認できない住居址である場合、「住居址」であるか、「敷石遺構」であるか、判別が難しい。多くの場合は、炉址を伴うか否かで、居住を行なった可能性がある建物ということで「住居址」と判断する。また、敷石住居址の遺存状態が悪い場合は、住居形態が不明である場合が少なくない。

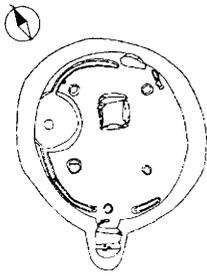
柄鏡形住居の空間部については、主体部、柄部に分け、主体部では、炉址周辺部を「炉辺部」、柄部に対する住居奥の部分を「奥壁部」、主体部で柄部に近い空間を「出入口部」、柄部と主体部が接する部分、出入口部の柄部と接する部分を「連結部」と呼称する（本橋一九八八）。

図2は、1から3までが加曾利E3新式期あるいは併行期の柄鏡形住居址である。1は、山梨県都留郡西桂町宮の前遺跡で、平面形態が円形、周溝をもつ四本柱の住居址である。柄部に曾利Ⅲ式土器の埋甕と階段状の施設をもつ。四本柱で、出入口部の周溝の間に埋甕がある点は、潮見台型の住居形態に類似するが、住居址の長軸に対する柄部の長さが一三%を占めることから柄鏡形住居の範疇に入れることができよう。図2—2は、長野県千曲市屋代遺跡で、隅丸方形の竪穴住居に配石状の柄部をもつ。壁と敷石の間にテラス状の空間がある。埋甕は、出入口、柄部、柄部先端と三箇所のみられる。出入口部の圧痕文土器、柄部と柄部先端には加曾利E3新式土器が埋設されていた。柄部先端の埋甕は、両耳壺である。3は、神奈川県川崎市初山遺跡西一号住居址で、主体部南側の壁が確認できないが、おむね円形の主体部に方形の柄部をもつ住居形態である。柱は壁柱穴で、石囲炉址から出入口部に敷石と対ピットがあり、加曾利E3新式土器が入れ子で埋設されていた。柄部先端には胴部下半から底部の撚糸文土器が主体部方向に向けて埋設されていた。

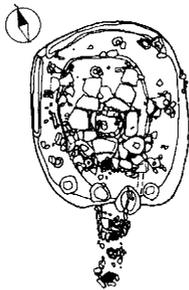
### Ⅲ 拡大期の柄鏡形住居

加曾利E4古期から柄部が大きくなり、連結部の対ピットが定着する傾向にある。

4は、相模原市寺原遺跡一〇号住居址で、主軸が七・五m、主体部四・五m、柄部長さ二mの柄鏡形住居址である。主体部の敷石は遺存状態が悪く、石が抜けている部分が多い。柄部には大きめの板状の石を使用している。石囲炉で、対ピットをもち、柄部先端に加曾利E4式の鉢形土器が埋設されている。5は、相模原市当麻遺跡第一号敷石住居址で、主体部が円形で、主軸が五m、柄部が一・六mを測る。壁や柱穴は確認されていない。石囲炉は主体部中心より



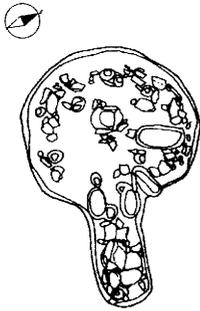
1 宮の原遺跡 3号住居址



2 屋代遺跡 SB5325



3 初山遺跡西 1号住居址



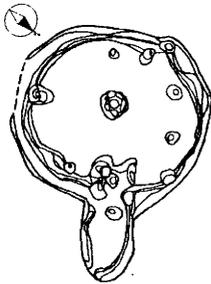
4 寺原遺跡 10号住居址



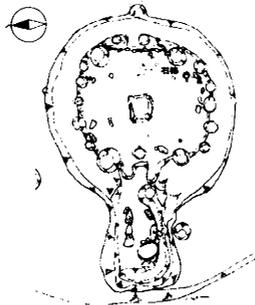
5 当麻遺跡第 1号敷石住居址



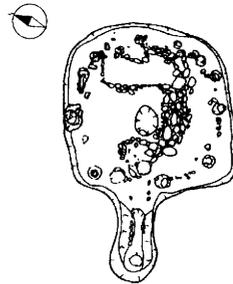
6 田篠中原遺跡 26号配石遺構



7 洋光台猿田遺跡



8 東台遺跡 20号住居址



9 新山遺跡 22号住居址

図2 出現期の柄鏡形住居址

やや奥壁部よりにみられる。埋甕は連結部と柄部先端にあり、胴部下半から底部の曾利V式土器が正位に埋設されている。連結部の土器は底部に穿孔がみられる。群馬県富岡市田篠中原遺跡は、加曾利E3新式期から敷石住居がみられるが、柄鏡形住居は加曾利E4式期になってからである。敷石の状態が水平でないことから報文では「配石遺構」として記されている。炉址と埋甕の位置で柄鏡形として捉えている。6は、二三号配石遺構で、石囲炉の周辺には石のない空間があり、柄部先端に胴部過半から底部の土器が二個体埋設されている。主軸が六・四m。柄部の長さが三・四mを測る。7は、神奈川県横浜市洋光台猿田遺跡第一〇号住居址で、円形の主体部に周溝が巡り、連結部には対ピットと埋甕がみられる。主体部の周溝は、前段階の様相を残している。炉址は土器片囲炉で、埋甕は加曾利E3新式土器が利用されている。主軸は四m、柄部の長さは一・四mである。8は、埼玉県ふじみ野市東台遺跡第一地点の二〇号住居址である。円形の主体部で、壁柱穴と壁との間にテラスをもつ。奥壁部に縁石があり、柄部にも配石がみられる。埋甕は、出入口部と柄部にある。出入口の埋甕は加曾利E4式土器の両耳壺が埋設されており、胴部に穿孔がみられる。柄部の埋甕は主体部に向けて斜位に埋設されている。奥壁部には縁石に石棒が含まれていた。9は、東京都東久留米市新山遺跡二三号住居址で、主体部は隅丸方形で、主軸が五・五m、柄部が三・六mである。奥壁部に配石、炉辺部に敷石がみられる。壁柱穴で、連結部には埋甕が二箇所、柄部には配石があり、先端にも埋甕がみられる。奥壁部に縁石、柄部には配石があり、先端に埋甕がみられる。埋甕は出入口部にもみられる。図3・1は群馬県利根郡みなかみ町梨ノ木平遺跡の敷石住居址で、主体部に板状の石を用いている。柱は壁柱穴で、敷石は柱穴の内側に施され、敷石の間には小礫が埋め込まれている。炉は、石囲埋甕炉で、加曾利E4式土器の胴部下半から底部の土器が連結部に埋設されていた。2は、屋代遺跡SB537の柄鏡形住居址で、埋甕は、連結部と柄部先端にみられる。主体部は方形で、壁際に周溝があり、壁柱穴の構造になっている。敷石は板状石で、特に出入口部に大きめの石を配し

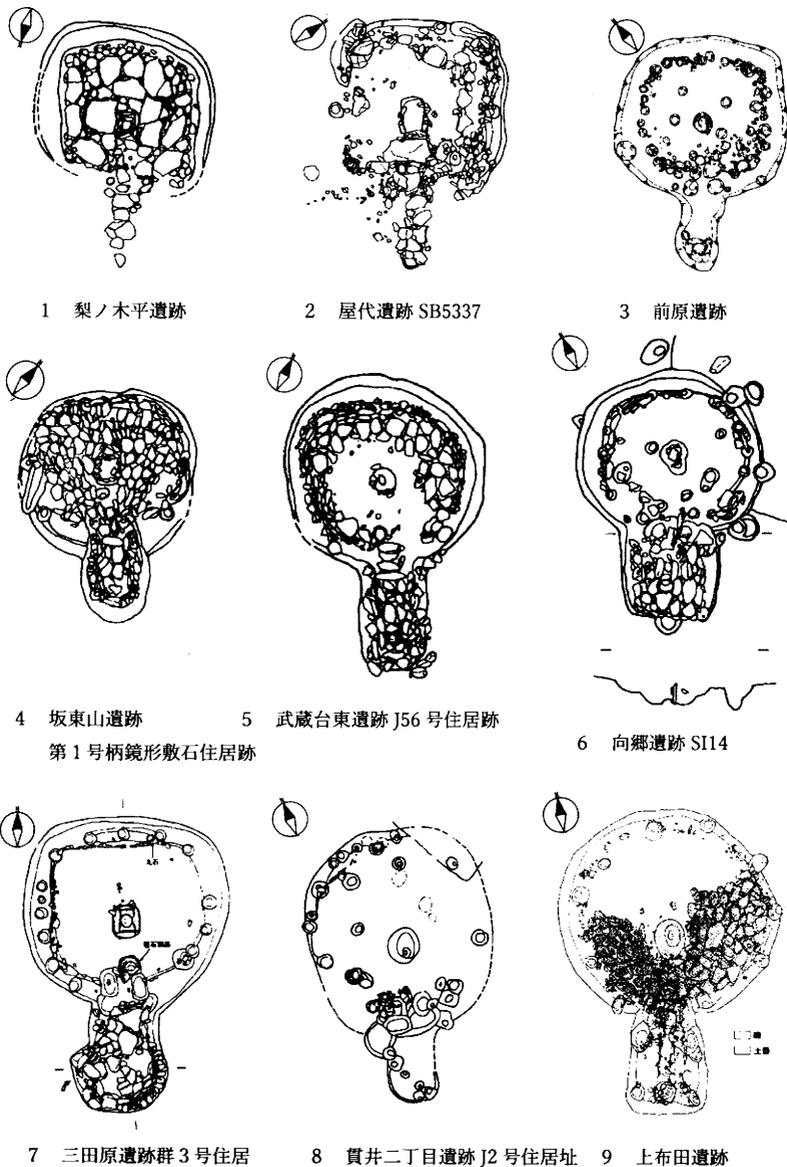


図3 拡大期の柄鏡形住居址

ている。炉は石囲土器敷炉で、埋甕は加曾利E4式土器の口縁から底部の土器を埋設し、柄部先端では二個体入れ子で埋設されていた。主軸が四・九m、柄部の長さは、一・五mである。3は、東京都小金井市前原遺跡例で、主体部は隅円方形である。小礫が柱穴に沿って配される柄鏡形住居址で、埋甕は出入口部と柄部先端にみられる。出入口部には二対のピットがみられる。埋甕は、出入口部の南側にもみられる。この付近には、礫の代わりに土器片が埋め込まれている。4は、埼玉県坂戸市坂東山遺跡第一号柄鏡形敷石住居跡で、遺存状態が良好である。円形の主体部に柄部がつくもので、主軸は五・二m、柄部が一・八mで全体に敷石が施されている。主体部には周溝がめぐり、溝の上に柱穴がつくられ、敷石は柱穴の内側にある。連結部には対ピットと溝状のピットがみられる。埋甕はみられない。後期初頭称名寺I式期である。5は、東京都府中市武蔵台東遺跡S155号住居址で、円形の主体部に柄部がつく敷石住居址である。主軸が五m、柄部の長さは一・八mである。加曾利E4式土器が、出入口部と柄部先端に二個体埋設されている。さらに主体部の東側にも胴部の埋甕がみられる。炉址は石囲炉で周辺部は敷石がない空間がある。壁柱穴で内側に敷石が施されている。6は、東京都多摩市向郷遺跡S124号住居址で、円形の主体部に敷石を伴う柄部がみられる。主体部には周溝が巡る壁柱の構造である。縁石が周溝の内側にみられる。主軸が五・四m、柄部の長さが三・五mである。柄部の幅が二mで、かなり幅が広い点特徴的である。埋甕は、加曾利E4式の両耳壺が埋設されていた。また、連結部の対ピットの間立石がある。7は、長野県佐久市三田原遺跡三号住居址は称名寺I式期である。隅円方形の主体部に半円形の柄部をもつ。敷石は柄部のみにみられ、主体部には柱穴の内側に縁石が配されている。石囲埋甕炉である。奥壁部には溝があり、その溝の中から丸石が出土した。連結部には対ピットと中央には石皿が埋設されている。埋甕の代用であろうか。さらに、連結部に立石がみられる。8は、東京都練馬区貫井二丁目遺跡J2号住居址である。円形の主体部に土坑状の柄部がつく形態である。奥壁部の壁際に土器列が配されている。連結部に

は対ピットと埋甕がみられる。出入口部に西側の床面に逆位の土器とともに円礫が出土した。なお壁部の主軸上に称名寺Ⅰ式土器が埋設されていた。9は、東京都調布市上布田遺跡例で、円形の主体部で柄部の先端に角をもつ形態である。奥壁部に石のない空間があり、主体部には敷石、柄部には連結部と柄部先端の埋甕の間に配石がみられる。柱穴は壁上に巡り、対ピットは連結部と柄部にもみられる。埋甕は連結部と柄部先端にみられる。

拡大期の柄鏡形住居は、加曾利E4古式段階のものは、洋光台猿田遺跡や前原遺跡の事例のように柄部の幅が狭く、長さも短い傾向があるが、加曾利E4新式期になると向郷遺跡や上布田遺跡のように柄部の幅や長さともに大きくなり、対ピットの柄部の規模が拡大し、対ピットも複数みられる事例が出てくる。連結部の対ピットが溝状に変化した坂東山遺跡など、後期初頭称名寺式期になると事例が増えてくる。また、同時に埋甕をもたない柄鏡形住居が後期になると多くなる傾向がみられる。

柄鏡形住居の柄部については、図4で主体部と柄部をあわせた主軸と柄部の長さの関係を示した。加曾利E3新式期の柄鏡形住居は柄部の短いものが多い。加曾利E4古式期になると主軸が8m以内で、柄部の長さが2m以内のもの集中し、この傾向は加曾利E4新式期になると2m前後にまとまってくるようである。柄部の拡大は称名寺式期には継承されるが、後期堀之内1期になると2mを超える柄部をもつ事例が多くなる。

#### IV 潮見台型と柄鏡形住居の分布について

潮見台型の住居は加曾利E2式期あるいは曾利Ⅱ式期に出現し、図5にあるように中部地方の天竜川流域と南関東、酒匂川流域、相模川流域、鶴見川流域に集中し、多摩川右岸の流域などにもみられる。中部地方の潮見台型住居

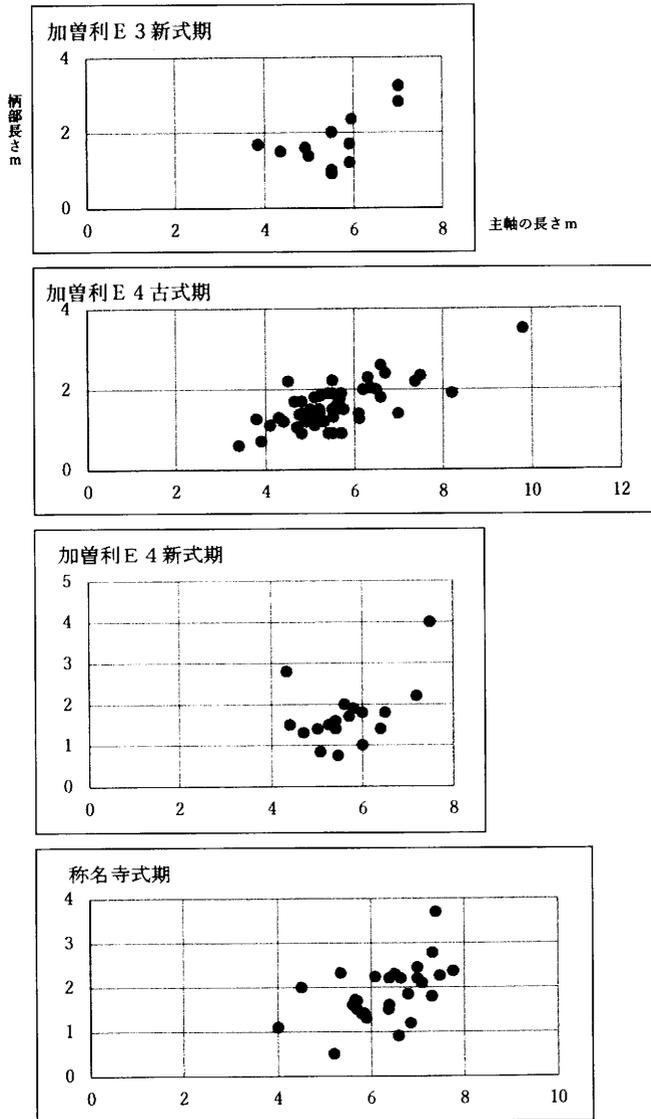


図4 柄鏡形住居址の規模



つの居住空間としての広がりをもつと考えられる(本橋二〇一三)。潮見台型住居と柄鏡形住居の共通点は、小張り出し部もしくは連結部や柄部に埋甕をもつことである。この点を主な論拠として、山本暉久は潮見台型を柄鏡形の初期に位置付けている(山本一九七七他)。しかしながら、潮見台型は明らかに、出現期、加曾利E3新式期の柄鏡形住居の分布と必ずしも一致しない。潮見台型や石壇など配石をもつ住居址がみられる諏訪地域には出現期の柄鏡形住居址はみられない。柄鏡形敷石住居址がみられるのは、後期になってから諏訪地方やより北の山地地域に拡がっていくようである。また、浅間山麓南面では、屋代遺跡のように加曾利E3新式期の柄鏡形敷石住居(図2・2)は、同じ時期に円形竪穴住居址が存在するが、加曾利E4式期には大型の柄鏡形敷石住居址(図3・2)がみられる。加曾利E3新式期の柄鏡形住居を構築するというきまりが受け継がれ、次の加曾利E4式期にも柄鏡形敷石住居を造つたものと考えられる。また、三田原遺跡原遺跡の柄鏡形敷石住居址(図3・7)や郷土遺跡のように柄鏡形住居で集落が構成されるような遺跡がある。郷土遺跡は、加曾利E4式期になって柄鏡形住居が伝播し、定着する。長野県佐久市吹付遺跡も加曾利E4式期になってから柄鏡形敷石住居が出現する(本橋二〇〇三)。

山地地域の柄鏡形住居は、山本の主張するように、柄鏡形敷石住居として出現した可能性が高いが(山本二〇一〇他)、同時に南関東、武蔵野台地や多摩丘陵では敷石をもたない柄鏡形住居が出現したものと考えられる。柄鏡形住居は、加曾利E3新式土器もしくは、加曾利E4式土器を伴うことから加曾利E式土器とともに急速に分布が拡大したものであろう。柄鏡形住居は、主として丘陵部や山地地域に分布が拡大する一方、例えば千葉県松戸市金桶台遺跡や袖ヶ浦町山鹿貝塚にみられるように、後期になってから古東京湾沿岸に波及していったと考えられる。

## V 環状集落の崩壊と柄鏡形住居の出現

出現期の柄鏡形住居が存在する宮の原遺跡では、柄鏡形住居が図2・1の一軒と円形竪穴の敷石住居が存在する。また、寺原遺跡では、加曾利E3新式期に奥壁部の配石を伴う潮見台型住居が存在し、加曾利E4式期には柄鏡形住居となる。ひとつの遺跡で潮見台型と柄鏡形住居が存在するのは、寺原遺跡の他に、川尻中村遺跡や大地開戸遺跡など、相模川上流域に集中する。

ところが、出現期の柄鏡形住居がみられる多摩丘陵や武蔵野台地では、潮見台型住居から柄鏡形住居への継続性あるいは連続性はみられない。表では、時期ごとの遺跡の存続期間について一覧にしたものである。縄文時代中期後葉加曾利E1式期から加曾利E2式期、加曾利E3古式期で途絶える時期があり、柄鏡形住居が出現する加曾利E3新式に画期があるものと考えられる（本橋二〇一七）。

加曾利E3新式期における画期は、住居構造からもみられる。竪穴の掘り込みは浅くなり、柱は壁際につくられるようになる（本橋二〇〇五）。加曾利E2式期までは、関東ローンを深く掘り込み、柱穴が住居内側にある構造であったものが、次第に掘り込みが浅く住居形態も不整形なものなど多様になる。

環状集落がみられる埼玉県児玉町古井戸遺跡と将監塚遺跡は、距離的に近い位置にある遺跡であるが、柄鏡形住居址は、古井戸遺跡に加曾利E4式期が一軒存在するのみである。また、埼玉県行司免遺跡や諏訪原遺跡は、大規模な環状集落であるが、加曾利E4式期まで集落は存続せず、柄鏡形住居もみられない。

縄文時代中期中葉から末葉まで、継続して住居が存続する東京都西東京市下野谷遺跡では、大規模な環状集落がみられるが、環状の中心部分の墓域に柄鏡形住居がつくられている。すなわち、加曾利E3新式期までの居住域と墓域

表 縄文時代中期後葉の主な遺跡

遺跡名	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3		加曾利E4		称名寺	遺跡名	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3		加曾利E4		称名寺
			古	新	古	新					古	新	古	新	
東京都下野谷	●	●	●	●	●	●	●	埼玉県西原大塚	●	●	●	●	●		
富士見池遺跡群		●	●	●				古井 <sup>i</sup>		●	●	●	●		
扇山	●		●	●	●	●	●	将監塚		●	●				
池淵		●	●	●	●			鎌倉公園					●	●	●
貫井 <sup>i</sup> ・J11				●		●	●	樋ノ下						●	●
堀北		●	●	●				諏訪野	●	●					
中村橋		●	●	●				行司免	●	●	●	●			
大泉井頭		●	●	●	●		●	板東山		●	●	●		●	●
八ヶ谷 <sup>ii</sup>	●	●	●	●				志久					●		
落合	●	●	●	●				群馬県田篠中原					●	●	●
新山	●			●	●			三原田	●	●	●	●	●	●	●
菰谷		●	●	●	●	●		南蛇井増光寺					●?	●	●
桜木	●	●	●	●	●			行田梅木平					●	●	●
はらやま	●	●	●	●				新堀東源ヶ原	●	●	●	●	●	●	●
武蔵台東		●	●	●	●	●		中郷	●	●	●	●	●	●	
NT.72	●	●	●	●	●	●	●	長野原一本松		●	●	●	●		
NT.796		●	●	●				横壁中村		●	●	●	●	●	●
NT.57				●	●	●		大根南遺跡群		●	●	●			
恋ヶ窪東	●	●	●	●	●			(曾利Ⅰ)	(曾利Ⅱ)	(曾利Ⅲ)	(曾利Ⅳ)	(曾利Ⅴ)			
向ノ岡		●						長野県増野新切	●	●	●	●			
宇津木台	●	●	●	●				棚畑	●	●	●	●			
向郷	●	●	●	●	●			居沢尾根	●	●					
神奈川県瀬見台		●	●					花上寺	●	●	●	●	●		
新戸				●	●			荒神山		●	●		●		
当麻	●	●	●	●	●	●	●	曾利							
大熊仲町	●	●	●	●	●	●		三田原遺跡群				●		●	●
桜並		●	●	●	●	●		郷上	●	●	●	●	●	●	●
上中丸	●	●	●	●				屋代			●	●	●		
樋ヶ原A		●	●	●	●	●									
月出松	●	●	●		●	●	●								
尾崎	●	●	●	●	●										
川尻中村		●	●	●	●										
大地間 <sup>i</sup>			●	●	●										
勝坂				●	●										
寺原		●	●	●	●										

の場の使い分けの決まりが中期末葉に失われた結果ととらえることができよう（本橋二〇〇〇）。

## VI おわりに

柄鏡形住居の集落におけるあり方は、武蔵台東遺跡で分析したように、加曾利E4式期にはひとつの住居形態として柄鏡形敷石住居が定着していたことがわかる。武蔵台東遺跡では、新しい住居をつくるために、廃棄された柄鏡形敷石住居の石材を利用して、新たに柄鏡形敷石住居が構築されていたものと考えられる。加曾利E4式期の集落にあっては、柄鏡形敷石住居のイメージが縄文人の中にあつて、それをつくるために集落内にあつた石材を利用して新しい敷石住居を構築する。つまり、柄鏡形敷石住居の遺存状況を検討すると集落は同時に何軒も住居が存在していたのではなく、住居の作り替えによって、一軒か数軒で構成されていることがわかる。柄鏡形敷石住居の構築を通じて集落における人間行動を追跡することができる（本橋二〇一四）。また、柄鏡形住居址は、縄文時代中期からの住居内祭祀といわれている石壇状の配石や立石、埋甕が、柄鏡形住居の出現にみられるように奥壁部から出入口部、柄部へと祭祀的な場の変化をみることができると考えられる。柄鏡形住居は、山地や丘陵地に縄文時代中期後葉に柄鏡形敷石住居として出現した、ひとつの住居形態であると考えられる。そして、そこには石棒や丸石、石皿の出土状態にみられるような祭祀的な特徴を備えている事例も少なくない。

中期までの居住域と墓域に分かれる環状集落の形態が、中期末葉には集落が各住居単位の規模に縮小する。一方で、遺跡によっては大規模な配石遺構をとまなう集落が形成される。恐らく、後期には核となる大規模遺跡と小規模な遺跡とがあり、遺跡によって機能的な役割のようなものがあった可能性がある。図6は、長野県佐久市岩下遺跡の配石

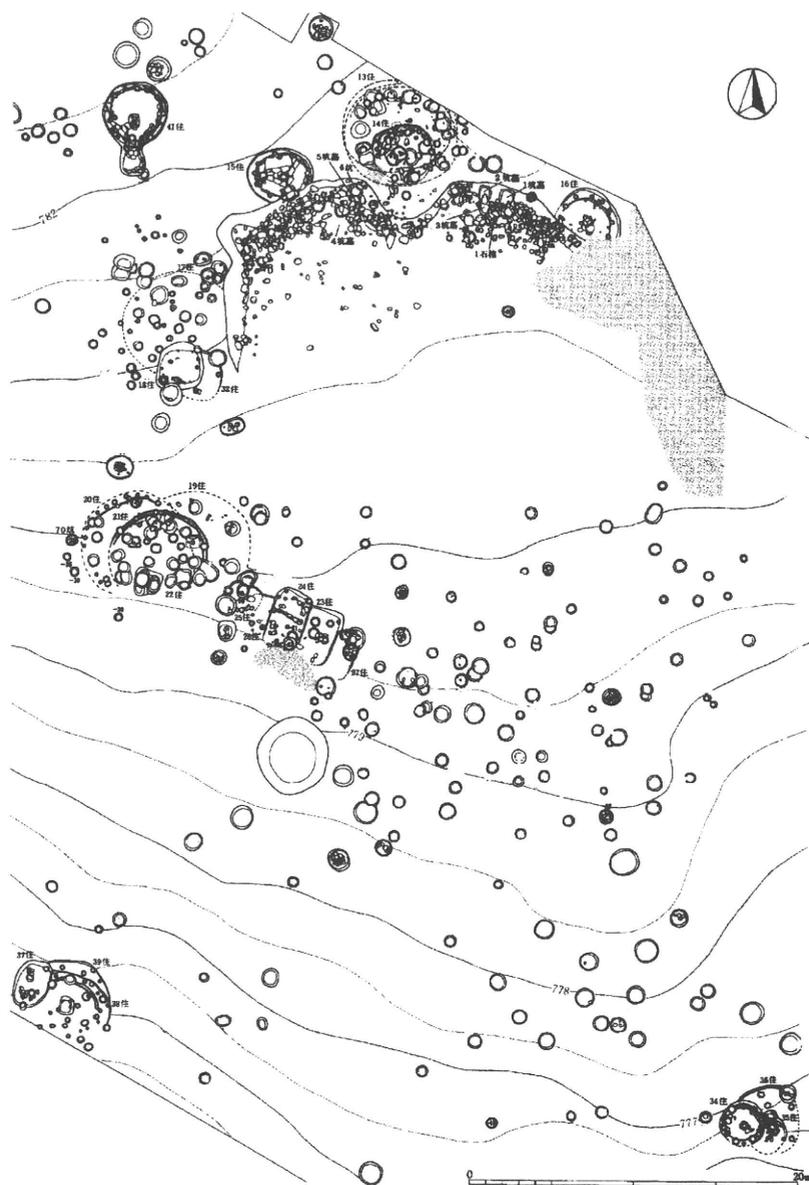


図6 岩下遺跡 中期後葉から後期中葉の遺構配置図

遺構と柄鏡形敷石住居址などの配置図である。北側にあつた後期初頭の柄鏡形住居は、後期前葉から配石遺構に柄鏡形敷石住居が取り込まれるような位置につくられる。配石遺構の中には石棺墓などの墓がつくられ、墓域と住居群がつながるような位置関係にある。山地地域の大規模な遺跡では、柄鏡形敷石住居が墓域などの葬送儀礼のような祭祀的な特徴がより顕在化する傾向がみられる。集落に人間がより定着し、その場にとどまるような、あるいは集落を構成する人の結束の強い現れが列石などの配石遺構であると考えられる。

柄鏡形住居が「住居」でない可能性を指摘する議論が三〇年を経て未だに決着をみない。柄鏡形住居の性格を一元に捉えるのは困難と考える。柄鏡形住居址のなかには、床面に焼土が堆積していたり、石棒片が集中して出土したり、祭祀的な行為の痕跡を想定させる事例が少なくない。しかしながら、先にもように柄鏡形住居を「住居」であることを否定してしまつたら、縄文人はこの時期、どのような住まい方をしていたか。より多くの事例から、疑いもなく柄鏡形の建物は「住居」として機能していただろうが、すべてが同じ機能を果たしていたかは検討の余地があろう。また、廃屋後の利用は、住居使用時点とは別に検討すべきものと考ええる。

## 引用参考文献

- 桜井清彦 一九六七「縄文中期の集落跡―横浜市洋光台猿田遺跡」『考古学ジャーナル』No.七 巻頭写真、二八頁
- 村田文夫 一九七五「柄鏡形住居址考」『古代文化』第二七巻 一号 一―三三頁
- 本橋恵美子 一九八八「縄文時代における柄鏡形住居址の研究―その発生と伝播をめぐって」『信濃』第四〇巻八号 三二―四四頁・九号 五二―六五頁
- 本橋恵美子 一九九五「縄文時代の柄鏡形住居の発生について」『帝京大学山梨文化財研究報告』第六集 四一―六八頁
- 本橋恵美子 二〇〇三「縄文時代の中期後葉の住居構造の分析―浅間山麓周辺における柄鏡形住居の発生について」『長野県考古学会誌』第一〇三・一〇四号 五九―八八頁
- 本橋恵美子 二〇〇五「縄文時代中期後葉の集落形態の検討―石神井川流域の住居分析から」『土曜考古』第二九号土曜考古会 五三―八二頁
- 本橋恵美子 二〇〇六「柄鏡形住居の出現と環状集落の終焉―縄文時代中期集落形態の変化を追う」『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣 一三三―一六六頁
- 本橋恵美子 二〇一三「敷石住居址における居住空間の検討」『東国の考古学』群馬県考古学研究会 一九―三四頁
- 本橋恵美子 二〇一七「縄文時代における柄鏡形住居址の再検討」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』六一書房 二二三―二三四頁
- 山本暉久 一九七六「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』第二八巻二号・三号 一―二〇頁
- 山本暉久 一九八八「中部山地における柄鏡形（敷石）住居の成立をめぐって」『長野県考古学会誌』第五七号 二九―四二頁
- 山本暉久 一九九三「横浜市洋光台猿田遺跡発見の柄鏡形住居址とその遺物」『縄文時代』第4号 八七―一二頁
- 山本暉久 一九九四「石柱・石壇をもつ住居址の性格」『日本考古学』第2号 一一―二六頁
- 山本暉久 二〇一〇『柄鏡形（敷石）住居と縄文社会』六一書房
- 赤城高志 一九八六「調布市上布田遺跡―第2地点の長さ調布市埋蔵文化財報告23」調布市教育委員会 調布市遺跡調査会
- 天野賢一他 二〇〇二「川尻中村遺跡 剣道51号（長竹川尻線）新小倉橋新設事業に伴う調査報告2 財団法人かながわ考古学財団調査報告133」財団法人かながわ考古学財団
- 鶴飼幸雄他 一九九〇『棚畑遺跡』茅野市教育委員会
- 宇賀神誠司 二〇〇〇「三田原遺跡群」『上信越自動車道埋蔵

- 文化財調査報告書19―小諸市内その3 長野県埋蔵文化財発掘調査報告書52』日本道路公団 長野県教育委員会
- 岡本孝之他 一九七七『尾崎遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告13』神奈川県教育委員会
- 小田静雄他 一九七六『前原遺跡』国際基督教大学考古学センター
- 河野喜映他 一九九六『青野原バイパス関連遺跡 梶ヶ原遺跡・大地開戸遺跡・明日庭遺跡・長谷原遺跡・大地遺跡 かがわ公庫が鶴財団』財団法人かがわ考古学財団
- 菊池 実 一九九〇『田篠中原遺跡―縄文時代中期末の環状列石・配石遺構群の調査 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査報告書第11集』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 潮見台遺跡調査団 一九七一『神奈川県川崎市潮見台遺跡発掘調査報告書』
- 遮那藤麻呂他 一九七三『増野新切遺跡』長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―下伊那郡高森町地区その2―昭和47年度』日本道路公団名古屋支社 長野県教育委員会
- 白石浩之他 一九七七『当麻遺跡・上依知遺跡―一般国道線改良工事にもなう調査 神奈川県埋蔵文化財調査報告書12』神奈川県教育委員会
- 鈴木秀雄他 一九九六『坂東山/坂東山西/後B 首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査IX 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋健樹他 一九九七『神奈川県津久井郡津久井町 寺原遺跡発掘調査報告書』津久井町教育委員会
- 坪田幹男 一九八七『埼玉県入間郡大井町 東部遺跡群Ⅷ文化財調査報告第16集』大井町教育委員会
- 奈良奏史他 一九九三『宮の前遺跡発掘調査報告 西桂町文化財シリーズ第15号』西桂町教育委員会
- 能登 健 一九七七『梨ノ木平遺跡』群馬県教育委員会
- 林 茂樹他『月見松遺跡緊急発掘調査報告書―天竜川河岸段丘上における縄文中期(初頭―終末)集落址』長野県伊那市教育委員会
- 坂東雅樹他 一九九九『武蔵国分寺西方地区 武蔵台東遺跡Ⅱ』都営川越住宅遺跡調査団・都営川越道住宅遺跡調査会
- 水沢教子他 二〇〇〇『更埴条理遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡) 上信越自動車道埋蔵文化財調査24―更埴市内―長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書51』日本道路公団 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター

本橋惠美子 一九八五「丁2号住居址について」『貫井二丁目遺跡』東京都住宅局 練馬区遺跡調査会

山崎 丈他 一九八一『新山遺跡 東久留米市埋蔵文化財調査報告第8集』新山遺跡調査会 東久留米市教育委員会

渡辺 誠 二〇〇七『川崎市宮前区初山遺跡発掘調査報告』

川崎市教育委員会